



Marianna Angels

2021. Spring
マリアンナエンジェルス通信 Vol.19
発行 聖マリアンナ医科大学ナースサポートセンター
〒216-8511 神奈川県川崎市宮前区管生 2-16-1
TEL 044-977-8111 (代)
http://www.marianna-u.ac.jp/hospital/
年 1 回発行

M.A通信 編集部
Special Report!

「看護師特定行為研修センター」 開講1年を振り返って — 研修の成果と今後の課題 —



(筆者一番左)

緊急事態宣言発令からのスタート

2020年4月1日、当センター（以下Registered-Nurse-Action=RANセンターとする）は開講しました。開講1週間後から緊急事態宣言が発令され、直接医師から学ぶ重要な演習が行えず急遽オンライン授業や密を避けての実技演習など、2020年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止対策を第一に考えた研修を余儀なくされた1年間でした。しかし、法人内に看護師の卒後教育とするRANセンターが組織化され、またこの1年間で特定行為教育の独自のカリキュラムの基礎作りができたことは大きな成果であるといえます。振り返るとカリキュラムの作成から具体的な方法論まですべてを作り上げていく過程の教育ではありましたが、3名の研修生全員が190症例以上の医行為を経験し、1年間の学習を修め臨床現場に送りだせた事が一番の成果だと実感しています。



21区分38行為を1年課程で行なう 唯一の大学病院の教育体制

RANセンターは21区分38行為の医学教育を行う13機関（全272機関：2021年2月）のなかで唯一の大学病院です。看護教育を受けてきた看護師が医行為を取得することは臨床推論・臨床判断・臨床疫学などの医学教育を受ける必要があります。e-ラーニングのオンライン学習で講義を受けますが、それだけで理解するのは困難です。当法人内には特定行為の教育経験のある医師や医学教育の経験豊かな医師、また特定行為の教材作成に携わった医師や薬剤師がおり、特定行為の教育に大変協力的で演習・実習において研修生への助言・指導をしてくれます。また診療看護師もプレゼンテーションや症例レポートの支援に協力的です。このような多職種から手厚い教育を受けられるのは聖マリアンナ医科大学病院だからこそできる独自の教育体制だと思います。このような教育が特定看護師の医行為の実践における質の担保になっていくものと考えます。

RANセンターの今後の課題と 特定行為修了生への期待

この1年間研修生には、医行為の習得と同時に特定行為を看護として意味づける看護教育を意図的に行ってきました。研修生の学びを通して「医学教育」と「看護教育」の両面を網羅する教育プログラムが必要かつ重要であると確信できました。また、「書く力」「分析する力」「意思決定する力」を身につけるための特定行為教育の必要性も実感しました。次年度は、この3つの力とともに、特定看護師として自分が何をすべきか具体的な行動を起こすための意図的な教育を組み込んでいきたいと考えています。現在は法人内の職員のみを対象としていますが、最終的にはRANセンターの教育課程を修了した看護師を増やし急性期医療・地域医療に貢献していくことを目指しています。さらに質の高い教育内容として県内で選ばれる「特定行為研修指定機関」になれるよう努めて参ります。最後に特定行為の修了生にはこの1年間の学びを一つの節目とし、自己のビジョンに向かって最後まで諦めず、誰に対しても臆することなく自信をもってActionを起こす特定看護師になることを期待しています。

● 看護師特定行為研修センター 副センター長 鷹野郁与

診療看護師(NP)の活躍を紹介します!

診療看護師として働いて今思うこと

聖マリアンナ医科大学病院 阿部浩幸

診療看護師(Nurse Practitioner:以下NP)とは、看護職でありながら医師が主に行う診療を一定の制限下で行うことができる資格です。私は、これまで病棟・集中治療・救急・検査部門や診療所などで得た知識をより深くし、各々に関連づけることで、より良い患者対応が出来ると考えNPを志し進学しました。大学院修了後は臨床で通じる診断能力、技術を身に付けることがNPにとって重要であると考え、研修制度が確立している当院を選び、現在2年間の臨床研修を行っています。研修では医師やNPの先輩から知識・技術を熱心に指導していただいています。侵襲の高い技術を行うことへの怖さや不安を感じますが、医師のNPへの理解、手厚い指導を受けられることが心強く、技術の習得に励むことができています。看護師として患者中心に考えることを第一に、自分で考える力・臨床推論を用いたアセスメント能力・リスクを回避する力を身に付けることが必要だと日々感じております。NPの所属は看護部であり、各診療科で研修をおこないます。看護部で労務管理をしっかりと行い、ワークライフバランスを考慮した勤務をすることで仕事とプライベートの両立ができています。現在の自分があるのは今まで育ててくれた看護師の先輩、日々フォローしてくれる同僚のおかげです。これからはNPの業務で得たものをこれから出会う看護師仲間の皆様と共有して、新たな看護の楽しさを見いだせたらと考えております。

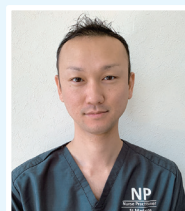


診療看護師ってなに?

— 当院、診療看護師の業務について紹介します —

聖マリアンナ医科大学病院 原島祐貴

診療看護師(Nurse Practitioner:以下NP)は、看護職でありながら、より医師側にたった診療を一定の制限で行える国が認めた新たな制度上の看護師です。NPになるには、5年以上の看護師経験のうち、指定された大学院でフィジカルアセスメント、病態生理学、臨床薬理学などの科目を習得し対象者の身体状況を的確に把握し、診断や治療を提案するプロセスを学びます。大学院修了と同時に日本NP大学院協議会のNP認定試験に合格すればNPになることができます。全国の中でも当院は、医師の指示のもと処方権が許されていることや特定行為以外の医療行為に対しても医師の監督のもと実施することができます。そのため知識・技術のスキルアップには申し分ない環境となっています。私達は、医師の指示、監督のもとNPとしての実践が可能となるため、必ず朝のカンファレンス、回診で治療方針を確認し、NPが指示や、点滴・内服の処方などの代行入力を行います。私はNPとして勤務するにあたり、ベッドサイドで患者さんと関わる時間を大切にしています。医師とは違う目線と看護師としての経験をもとに必要なと思われる治療介入について特定行為を十分に活かすことが可能です。患者さんに対する治療介入が円滑に行えることで、より良い医療が提供できる役割を果たすことができると考えております。



INFORMATION

就職説明会・施設見学・ インターンシップ

右記よりお申込みください。
(内容はHPにてご確認ください)



メール就職相談

随時受け付けています。
お気軽にお問合せください。



大学病院リニューアル計画



創立50周年を記念して、大学病院をリニューアルします。「選ばれる病院 ～人・社会・未来から～」をテーマに掲げ、高次医療を追求し、2023年新入院棟の完成を予定しています。最善・最適な医療を提供できる体制の構築を目指します。



「つながり強化」でCOVID-19 患者・家族の孤立と悲観に挑む

「週刊 医学界新聞」第3413号に寄稿しました!
救命救急センター 副院長 津田泰伸



新型コロナウイルス感染症

～マリアンナの現場での取り組みと看護教育体制について～

大学病院

コロナ禍で最良の看護ケアの提供を

大学病院救命救急センターでは、2020年2月から神奈川県重点医療機関としてCOVID-19重症患者の受入れをおこなってきました。未知なる感染症であり、何が正解かわからない中、試行錯誤の日々が続いていました。4月に入職した新入職者の安全を守るため、3カ月間一般病棟で研修を行っていただき、7月から当センターへの配属となりました。振り返ると、他病棟で基本的な知識・技術・態度を学び、立派に成長したスタッフは、当センターにとって頼りになる存在となっています。感染区域において患者さんをケアする看護師は、手袋やガウンなどのPPEを装着しながら自分自身をウイルスから守ること、クラスター感染を起こさないことを絶対条件に頑張っています。感染の波が激しく押し寄せる中、現時点までに当センターの看護師は誰一人感染していないことが私たちの誇りであり、先が見えないこの状況では、辛さが強調されますが、当センター看護師は部署ローテーションをしながら、全員で看護にあたり、ともに学び励み合っています。突如として隔離され孤立する患者さんと家族が、少しでも回復の意欲を高められるように、そして、制限された状況の中でも安全・安楽に療養生活が送れるように、最良の看護ケアの提供を考え続けています。コロナ診療だけでなく、救命救急センターとしてICUや救急外来も併設していますので、命を“救う”“守る”“繋ぐ”本来の救命救急センターの機能を維持しつづけるように一丸となって取り組んでいます。



救命救急センター 師長 熊木孝代

東横病院

コロナ禍でも、充実した看護教育体制のままに

当院は、新型コロナウイルス感染症による治療を積極的に受ける診療体制はありませんが、他疾患から新型コロナウイルス感染症に罹患している場合や疑似症患者に対して感染防止対策に努めています。新入職者は、4月入職時から2週間は病棟に配属されず、集合技術研修やグループワーク学習を強化し過ごしました。新入職者からは、「この2週間で、遅れをとってしまうのではないか」「何もわからない自分が現場に行くことで足手まといになるのではないか」という不安があったと言われていましたが、1年たった今、「研修が自信になり、足手まといにはならなかったかな。自分も健康で過ごせています」と笑顔で語ってくれました。当院は中規模病院のため、研修生が10名前後でもあり、研修中はCO2モニターで測定し3密を回避し、予定通り集合で新人研修を実施しました。研修では、経験と振り返り、再実践するという「実践ですぐ活用できる視点」を実感できるようにしています。2021年度は、従来通りチューターシップとチーム支援制度を実施、さらに丁寧なOJT実現のため1か月間のペアナースをします。ペアナースとは、新入職看護師と先輩看護師と2人の看護師が相互に補充し合って毎日看護ケアを実践することです。先輩看護師は実践したことに関して「どんな看護の考えがあったのか」など大いに語ります。コロナ禍にあっても、安全で安心な看護の提供を目指して教育体制を充実させています。



2階 HCU 師長 細井真紀子

西部病院

新人看護職員とともに実践する COVID-19 患者への看護

西部病院では、昨年の春から新人看護職員とともに COVID-19 患者への看護を実践しています。不安を抱えている新人看護職員もいましたが、私たちは「今の COVID-19 は世界を揺るがす災害です。その中で救命救急センターの看護師には感染予防策を徹底しつつ、患者の命を救い護る使命があります」と伝えました。元々、救急対応や災害時対応ができる看護師になりたいという夢を持って当センターに配置を希望していたこともあり、COVID-19 エリア担当に立候補してくれる方がたくさんいました。そこで、動画学習とシミュレーションを実施し、実践に備えました。実際の看護場面では、「COVID-19 患者から“私の話を聞いてくれて安心しました”と言われ、自分より患者さんの方がもっと不安だったことに気がきました」と話してくれました。患者との関わりを繰り返すなかで、新人看護職員が「看護って楽しいですね。もっと勉強してみたい」と話してくれたことがあり、うれしくて目頭が熱くなりました。私たちは、災害と感染に対して、患者さんが“その人らしく生活するために寄り添い支える”という看護の基本に何度も立ち返り、学ぶ機会を得ています。新人看護職員の看護実践を通して、みんなが学び、看護の質を高めようという組織でありたいと思います。



救命救急センター 副師長 川畑亜加里

多摩病院

院内の環境整備と知識と技術の共有

川崎市立多摩病院は、2020年2月から新型コロナウイルス感染症患者の受け入れを開始しました。5東病棟は2月にダイヤモンドプリンセス号の患者を初めて受け入れ、コロナ病棟として稼働が開始しました。コロナウイルス陽性者と疑似症患者との動線を分けるためレイアウトの変更や物品配置を検討し、汚染区域と清潔区域を明確にしたゾーニングを行い、PHSを活用しスタッフ間の情報共有を図れるよう環境調整を行いました。また wi-fi 環境を整え、iPad を使用し医師の診察やご家族とのリモート面会が出来るようにしました。汚染区域での業務は、慣れない防護服の取扱いや動線により、想像以上にスタッフのストレスや疲労を強める環境下でした。そのため様々な思いを表出する場としてデイリーミーティングを開催し、もやもやした気持ちや思いを語りあい共有しました。看護教育体制は、コロナの疾患や治療について医師や薬剤師を講師として学習会を開催、感染防止対策として個人防護服の着脱方法について ICT の指導のもと学びを深めました。また家族支援専門看護師も参加し、症例検討やデスカンファレンスを行い、看護の振り返りや倫理観が深められるよう努めています。コロナ病棟となり長期化しているため、12月からスタッフのローテーションが行われています。リリーフや異動者は初めての事も多く不安も強いですが、先輩看護師とペアとなり一緒に動きながらコロナ関連の知識や技術の共有を図っています。



5東病棟 副師長 貞方敬英

※新入職者とは2020年4月入職者のこと。

私の病院自慢

新型コロナウイルス感染症後外来を開設

新型コロナウイルス感染症後、様々な症状で悩まれている方が多いと言われています。そのような方に対して、2021年1月より専門外来を開設しました。この外来の特徴は、症状に応じて各専門医が連携しながら診察が行われ、多職種とも協働して対応していることです。まだ不明な点も多く、患者さんも多様な症状に不安もありますが、丁寧に寄り添いながら心のケアへ繋げたいと思っています。

緩和ケアセンター 師長 吉岡千恵子



病棟の看護師が脳血管撮影室の介助

東横病院では入院患者の6割が脳疾患です。脳神経・脳卒中センターで働く看護師は、超急性期～回復期まで幅広い看護ができるように、SCU・病棟・脳血管撮影室と3つの部署で勤務します。他院では、画像診断所属の看護師が脳血管撮影室の介助をすることが多いですが、当院は病棟の看護師が介助するのが特徴です。血管撮影室の介助ができる看護師は、病棟での看護をしながら、予定だけでなく緊急治療にも24時間対応しています。

4階病棟・SCU 師長 山田美音子



脳血管撮影室の様子

西部病院らしい看護を目指して! 「セル看護提供方式」の導入に挑戦

一部の部署で「セル看護提供方式」の運用を開始しました。「セル看護」は「限られた資源で勤務時間内に最高のパフォーマンスが発揮できる仕組み」とされています。そのため、師長とスタッフががらとなり、物品の配置や業務内容を繰り返し検討しました。働きやすい環境の中で、できる限りベッドサイドにいる時間を多く取り、患者のニーズに合わせて速やかに対応できる看護を提供しています。既に患者から「看護師が側にいるから安心」などの声があることや、スタッフの退勤時刻が明らかに早くなりました。今後は他の部署でも導入に向けて準備を開始する予定です。

看護部管理室 師長 田口佳寿美



身体拘束「0」を目指して

患者さんの安全を守る手段として身体拘束を実施する急性期病院は多くあります。しかし当院では、2020年度看護部目標を『患者の尊厳を守り、看護の誇りを守る』とし、身体拘束減少にむけて、各部署のよいケアを共有・倫理カンファレンスを実施し、身体拘束実施割合を12.7%と減少することができました。身体拘束は、医療安全と患者の尊厳の間で葛藤を抱えることがありますが、患者さんの尊厳を考え今後も多職種で取り組んでいきたいと思います。

救急災害医療センター 師長 野崎美穂



認知症ケアチームラウンドの様子

